



第292图 柱根实测图



第293図 鉄製品・銅製品実測図

(9) 鉄・銅製品

17が中世のピットより出土した銅製品である以外は、中世の包含層を中心に出土した鉄製品である。

鉄製品は釘状を呈するもの（1～10・15）、刀の刃のような断面形を呈するもの（11～14）、環状を呈するもの（16）がある。いずれも錆化が進行しているために原形は不明とせざるをえない。

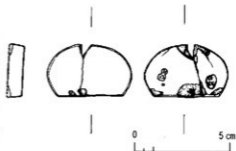
17は長さ5.7cm、幅1.2cm、厚さ2mmを計る銅製品である。全体の形状はヤスリ状を呈している。茎の部分の先端がわずかに欠損しているがほぼ完形のものであろう。一面に格子状の細く鋭い沈線が遺存する。用途については不明とせざるをえない。

(10) 銅銭

銅銭は12点出土した。多くは中世包含層からの出土であるが、中世のピット、溝より出土したものもある。文字は全てが判読可能であるが、遺存状況が悪く字体まで明確には読みとれないものも多い。13は開元通宝であるが裏面の上方に「ㄩ」の文様が見られる。

(11) 石帯

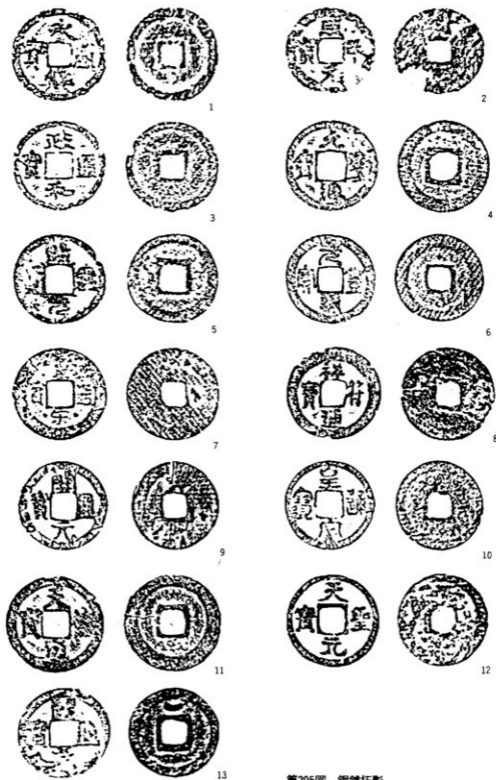
石帯は1点だけ出土した。縦2.8cm、横4.4cm、厚さ0.8cmを計る。楕円形の長軸と平行する一部分端が切りとれた形状を呈している。折れて欠損している部分があるもののほぼ完形である。側面および一面は丁寧に磨かれており光沢を持つが、2ヶ所のくぐり孔をもつ一面には光沢がない。材質はサヌカイトであると思われる。



第294図 石帯実測図

出 土 地	図 番 号	銭 種	出 土 地	図 番 号	銭 種
F-5 包含層	1	永業通宝	H-4 溝	8	祥符通宝
G-6 灰褐色砂質土層	2	咸平元宝	I-4 包含層 東端斜面南	9	開元通宝
H-5 包含層	3	政和通宝	〃	10	皇宋通宝
H-5~H-6 土堤包含層	4	元豊通宝	H-4 包含層北東部	11	天禧通宝
X-9 Pit 18	5	熙寧元宝	〃	12	天聖元宝
G-5 東端中央	6	元豊通宝	〃	13	開元通宝
H-4 Pit	7	皇宋通宝			

第143表 銅 銭 一 覧 表



第295圖 銅錢拓影

02 獣骨

出土した獣骨については香川大学に鑑定を依頼した。鑑定書と図版を記載する。

矢ノ塚遺跡出土の哺乳類遺体

香川大学教育学部

仲谷英夫

動物名

脊椎動物門

哺乳綱

奇蹄目

ウマ科 Equidae

ウマ Equus caballus LINNAEUS

部位

遊離した上顎右第1または第2大臼歯 (A-6 包含層)

遊離した上顎左第3・第4前臼歯・第1・第3大臼歯, 上顎右第3前臼歯・第3大臼歯・下顎右第1または第2大臼歯 (X-9 包含層)

年齢

いずれも成獣である。

人為的処置

認められない。

その他

歯の周囲に黒褐色の沈着物がある。

計測値 (すべてmm)

(X-9 包含層)

上 顎	歯冠長	歯冠幅
LP3	27.5	27.2
RP3	25.7+	19.7+
LP4	28.3	27.2
LM1	24.7	24.4
LM3	25.4	19.4
RM3	25.7	19.7
下 顎	歯冠長	歯冠幅
RM?	24.3	14.7

(A-6 包含層)

上 顎	歯冠長	歯冠幅
RM?	24.8	24.0



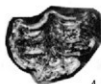
1



2



3



4



5



6



7



8

第296图 獸骨

図版の説明

ウマ

- 1 上顎左第3前臼歯 (X-9 包含層) 咬合面観 (×1)
- 2 上顎左第4前臼歯 (同上)
- 3 上顎左第1大臼歯 (同上)
- 4 上顎左第3大臼歯 (同上)
- 5 上顎右第3前臼歯 (同上)
- 6 上顎右第3大臼歯 (同上)
- 7 下顎右臼歯 (同上)
- 8 上顎右臼歯 (A-6 包含層) 咬合面観 (×1)

V ま と め

1. 弥生時代中期土器の編年

(1) 弥生土器の統計

矢ノ塚遺跡の弥生土器を分類し統計の数字を出すにあたっては、土器の残存度を $x/8$ で表現し、 $1/8$ を 1 単位として集計した。^(注1) 口縁部が完全なものも 8 単位となる。遺構から出土した土器だけを統計の対象とし、包含層出土のものは省いた。

弥生土器全体で器種別の割合は、第297図にみられるように、壺37.9%、甕37.3%、鉢10.1%、高杯5.2%、高杯脚台9.5%となる。

壺と甕の構成比はほぼ 1 : 1 となっている。この中には、弥生時代後期の土器も含まれている。

胎土別の割合は胎土 I 25.9%、II 40.9%、III 9.4%、IV 23.8%となる。I～IVの胎土・色調の特徴についてはすでに記述した。Iについては矢ノ塚遺跡の粘土である可能性が強い。IIは、弥生時代中期の土器によくみられるもので香川県内の久米池南遺跡の弥生土器はほとんどこのIIにあたる。また同じ普通寺市内の彼ノ宗遺跡^(注3)でも弥生時代中期の土器の大半は胎土IIである。まれに胎土Iからなる土器が混じる程度である。IIIについては弥生時代後期の土器に多くみられるものである。I～III以外をIVとして区別した。しかしIVの中にも色調で朱色、黒灰色を呈するなどの特徴的なものも含まれており独立して分類できるものもある。

胎土Iが全体の中で約半を占めるということは矢ノ塚遺跡の土器の特徴となる。発掘中に採集された粘土（おおむね暗灰褐色粘質土）を加熱すると胎土Iとほぼ同様の色調になることより、胎土Iは矢ノ塚遺跡内で採集された粘土である可能性が高いといえる。胎土Iは矢ノ塚遺跡の中では比較的古い様相を持つ土器に多くみられる。矢ノ塚遺跡で採集された粘土で作られた土器がまれにはあるが彼ノ宗遺跡からも検出されるという事実は興味深い。

次に各器種ごとに形態・手法別（以下タイプという）の割合をグラフ化した。器種ごとにタイプ分けをするにあたっては、紫雲山遺跡の土器様式^(注4)の分類を用いた。したがってグラフ中に表記されているA・B・C……、1・2・3……などの記号は矢ノ塚遺跡のタイプ分けで使用した記号とは全く無関係で、紫雲山遺跡で使用されたものである。

さらにその中を紫雲山I式、II式、III式、後期土器の四時期に区別した。区別するにあたっては紫雲山I・II式にまたがるもの、II・III式にまたがるものについては統計処理上、数字を半にして各期にわけた。遺跡全体の土器と合わせてS D85101の出土土器も同様の方法で統計しグラフ化した。S D85101は人工的な溝でなく自然河川に近い遺構であるため、一般的な土器構成を知ることができると判断したためである。

特に全体の壺・甕の構成比が1 : 1になるということを前提にして各時期毎の壺・甕の構成比をみていく。紫雲山I式の時期では壺14.9%、甕31.4%、II式では壺32.4%、甕24.3%、III式

では壺48.7%、甕24.3%、後期では壺4.0%、甕20.0%となる。後期には壺と甕が減り甕が増える。そのことを考慮した時、弥生時代中期の各期においては、甕よりも壺の方がやや多い構成比となるはずである。しかし統計上の数字にはそれが表れてなく、特に紫雲出山Ⅰ式の時期には壺・甕の比率が1:2となり逆に甕の方がはるかに多くなっている。

次にSD85101についてみる。器種別の構成比は、おおむね全体の構成比と同様となる。やや鉢が占める割合が多い。壺と甕の比率については、壺の方が多くなっており矢ノ塚遺跡で考えられる弥生時代中期の一般的な比率といえる。

紫雲出山Ⅰ式の時期では壺23.9%、甕77.0%、Ⅱ式では壺37.1%、甕11.5%、Ⅲ式では壺39.0%、甕11.5%となる。後期の土器は高杯が12.0%を占めるだけで、他の器種ではみられない。全体の統計と同様にSD85101の統計においても紫雲出山Ⅰ～Ⅲ式の各期において壺・甕の比率はアンバランスとなっている。

この数字上のアンバランスには、1つの原則的なものが見い出せる。それは矢ノ塚遺跡全体、SD85101ともに紫雲出山Ⅰ式では甕の占める比率が高く、壺が低い。またⅡ・Ⅲ式ではその反対となっているということである。従って、このアンバランスは、紫雲出山Ⅰ式の甕がⅡ・Ⅲ式に分類されるか、Ⅱ・Ⅲ式の壺がⅠ式に分類されることにより解決される。

他遺跡・他県の例をみると、昭和59年度に発掘調査が実施された前述の彼ノ宗遺跡では紫雲出山遺跡という壺A₁、壺B₁、甕₁、鉢₁が土坑より共伴して出土している。また岡山県では、凹線文のない甕を細分化して編年している^(注5)。これらの事例は、矢ノ塚遺跡の土器を紫雲出山遺跡の土器様式で分類した際に生じる数字上のアンバランスを解決する糸口を示唆するものと考えられる。

(2) 矢ノ塚遺跡の土器様式と年代

矢ノ塚遺跡の土器の分類にあたっては、1～4の手法を基準としている。3・4についてはともに凹線文手法が認められるものであるが、施される位置で区別した。これは紫雲出山遺跡の第2手法、第3手法におおむね類似する。1・2については紫雲出山遺跡で第1手法とされたものにあたる。口縁端部の形態、施文などより1より2が後出する手法である。そうすると、1～4の手法は1→2→3→4の順となり4が最も後出する手法となる。また3・4については(1)～(3)の区別をした。凹線文が明瞭なものを(2)とし、口縁端部の拡張の度合いが少なくなり凹線文が不明瞭なものを(3)とした。(3)を凹線文の退化期とした時、(1)～(3)についても(1)→(2)→(3)の順となり(3)が最も後出するものである。したがって各タイプ内での前後の関係については、その数字により知ることができる。高杯脚台₃-(3)-(a)が高杯脚台₃-(2)よりも先行し、その順番があてはまらない。

次に各タイプごとに口縁部から頸部にかけて施されるヨコナデ調整について注目した時、5つの分類が認められる。(1)ヨコナデは全く施されずにナデ調整が施されているもの。(2)ナデ調整のものとヨコナデ調整の両方が認められるもの。この場合ヨコナデの範囲はせまい。(3)ヨコナデ調

整だけが施されているが範囲はせまいもの。(4)ヨコナデ調整だけが施されているが範囲は広いもの。この場合、明瞭な凹線文が合わせて施されている。(5)ヨコナデ調整だけが施されているが範囲は広いもの。この場合、不明瞭な凹線文が合わせて施されている。

ヨコナデ調整の範囲については、口縁端部から口縁部内外面に向かって2～3cmが基準となる。土器の大きさ、器種などにより違いがあるが2～3cm以内のものを狭いとし、それを越えるものを広いとした。通常ヨコナデの範囲が広いとしたものは頸部、体部にまでヨコナデがおよぶものが多い。

これらの(1)～(5)の分類は施文と強い相関関係にある。すでに凹線文との関係については(4)・(5)で一部ふれた。凹線文については(1)・(2)では全く認められない。壺は(3)より認められ、その他の器種のは(4)より認められる。また凹線文以外の文様については、器種により若干の差があるが、(1)・(5)では少なく、(2)・(3)・(4)に集中する。その中でも特にほとんどの器種が文様により飾りたてられるのは(4)である。

(1)～(5)のヨコナデ調整による分類は、文様とも強い関係をもつことより、これらは5つの土器様式といってもよい。ここでは(1)～(5)の分類を、矢ノ塚I式～矢ノ塚V式の土器様式とする。

前述した1～4、(1)～(3)の手法と土器様式の関係についてはいくつかの例をみることにする。壺AにおいてはI式→A₁、II式→A₂、III式→A₃-(1)、IV式→A₃-(2)、V式→A₃-(3)となり、ひとつの様式は1手法から成り立つという関係になっている。壺BではI～III式は認められずIV式→B₃-(1)とB₃-(2)、V式→B₃-(3)となる。甕については、I式は認められず、II式→甕₁-(a)、III式→甕₁-(b)、IV式→甕₁-(c)と甕₃-(1)と甕₃-(2)、V式→甕₃-(3)となる。

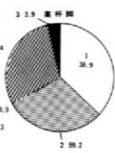
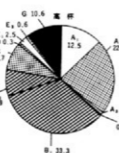
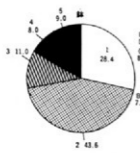
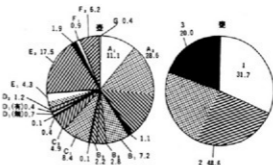
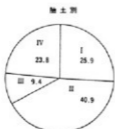
以上より矢ノ塚I式～V式の前後関係は手法の前後関係よりV式が最も新しいということが言える。また手法は各タイプの中での前後関係を知る基準にはなるが、様式を知る基準にはならないということも言える。

各タイプをI～Vの様式にあてはめると第144表のようになる。矢ノ塚I式では壺A₁だけが明確に認められたものである。しかし矢ノ塚II式の中で口縁部にナデ調整が施されたもののうち、古い様相をもつと考えられるものがある。それは壺C₁、壺E₁、甕₁-(a)、高杯A₁で認められる。それらの例は単独であるものが多いが、おそらく矢ノ塚I式となる可能性が強いと思われる。

矢ノ塚II式は第144表のとおりである。壺D₁、壺H₁、甕₁-(b)は矢ノ塚III式に含まれるものであるが、他遺跡の例なども含めて、そのうち古い様相をもつものは矢ノ塚II式になる可能性が高い。

矢ノ塚III式では、高杯脚台₃-(3)-(a)、甕₁-(c)の古い様相のものが含まれる可能性がある。また矢ノ塚IV式、V式については第144表のとおりである。

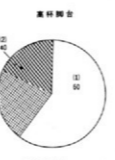
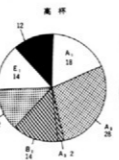
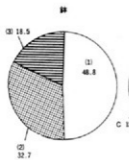
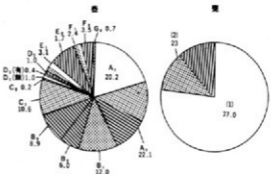
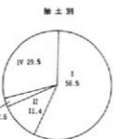
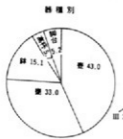
次に矢ノ塚遺跡の各様式とその年代について考えたい。矢ノ塚II式に含まれる土器は、北谷遺跡、紫雲山I式のものとはほぼ同様の様式をもつ。したがって中期2に属する。矢ノ塚I式はそ



	黒	赤	黄	高砂	高砂脚
I	14.9%	31.4	28.4	15.0	36.9
II	32.4%	24.3	43.6	31.7	24.6
III	48.7%	24.3	11.0	42.4	24.6
換	4.8%	20.0	17.0	10.9	3.9



(全 体)



	黒	赤	黄	高砂	高砂脚
I	23.0%	77.0	48.8	32.0	60.0
II	37.1%	11.5	32.7	40.0	20.0
III	39.0%	11.5	18.5	16.0	20.0
換				12.0%	

(S085101)

第29回 土器構成の割合

	矢ノ塚 I	矢ノ塚 II	矢ノ塚 III	矢ノ塚 IV	矢ノ塚 V
	中期 I (後)	中期 2	中期 3・中期 4		
壺 A	A ₁	A ₂	A ₃ -(1)	A ₃ -(2)	A ₃ -(3)
壺 B				B ₂ -(1) B ₃ -(2)	B ₃ -(3)
壺 C	(C ₁)	C ₁ C ₂		C ₃ -(2)	C ₃ (3)
壺 D		(D ₁)	D ₁ D ₂	D ₂ -(1) D ₃ -(2)	D ₃ -(3)
壺 E	(E ₁)	E ₁		F ₂	E ₄
壺 F			F ₁ F ₂ -(3)	F ₄	
壺 G				G ₄	
壺 H		(H ₁)	H ₁	H ₃ -(3) H ₄ -(2)	H ₄ -(3)
甕	(1-(a))	1-(a) (1-(b))	1-(b) (1-(c))	1-(c) 3-(1) 3-(2)	3-(3)
鉢		1	2	3 4-(1) 4-(2)	4-(2)
高杯 A	(A ₁)	A ₁	A ₂	A ₄ -(1) A ₄ -(2)	A ₄ -(3)
高杯 B				B ₁	B ₄
高杯 C				C ₁ C ₄	
高杯 D		D ₂		D ₃ -(1)	D ₃ -(3)
高杯脚台		1	(3-(3)-(a))	3-(3)-(a) 3-(2)	3-(3)-(b)

第144表 矢ノ塚遺跡の土器様式の構成と年代

れよりも先行するものであるが、中期第1段階の様式を構成する五条Ⅲ式よりも後出するものと考えられる。中期1の後半に位置するものであろう。

また矢ノ塚Ⅲ式～Ⅴ式については、若干の違いが認められるものの、ほぼ紫雲山Ⅱ・Ⅲ式と同じ時期と考えてよい。したがって中期3・4に属する。

以上矢ノ塚遺跡の土器様式と年代について若干の検討をしたが、十分とはいえない。この様式で前述した統計上の問題点が解消されているかの検討も時間の関係でなされていない。また弥生時代中期の土器に続くと思われる後期の土器との関係もほとんど明らかにできなかった。

矢ノ塚遺跡においては、竪穴住居や土坑から明らかに一括といえる土器は出土していない。そのために紫雲山遺跡の編年を見直すべきとしながらも、年代の検討などについては紫雲山遺跡に拠らざるをえなかった。今後県内で弥生時代中期の土器の資料が増えていく過程で検討する材料として編年試案を掲げておく。批判を乞いたい。

(注1) 丸亀市教育委員会『中の池遺跡発掘調査概要』—香川県丸亀市金倉町所在の弥生時代遺跡の調査—1982. 3. の方法。

(注2) 高松市教育委員会、昭和59年度調査

(注3) 善通寺市教育委員会『彼ノ宗遺跡』—弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—1985. 3.

(注4) 詫間町文化財保護委員会『紫雲山』—香川県三豊郡詫間町紫雲山弥生式遺跡の研究—昭和39. 9.

(注5) 高橋護「入門講座・弥生土器—山陽1・2」『考古学ジャーナル』No.173, 175. 1980年

2. 各時代の課題

矢ノ塚遺跡の調査結果が各時代の研究に提起する課題は多いといえる。最後にそれらの課題を挙示し、また調査区内での遺構の検出状況をもとに推測される矢ノ塚遺跡の範囲をまとめておきたい。

(1) 弥生時代

弥生時代中期の遺構・遺物については、香川県内において発掘調査例が少ないために貴重な資料となろう。遺構で注目されるのは12棟の掘立柱建物である。これらの柱穴の掘り方の形状は、多くが方形を呈する。通常この時期の掘立柱建物は倉庫の可能性を考えるものであるが、調査区内で検出された竪穴住居の数（断定できるものは1棟だけ）と比較した時、全てが倉庫になるとは考えがたい。S B 85103で建物遺構内に土坑を検出した。位置関係、出土遺物よりこの土坑はS B 85103にともなう可能性が強いと考えられる。しかし、この土坑以外に建物遺構にともなう他の遺構は全く検出されなかった。掘立柱建物の12棟のうち数棟は住居としての可能性を考えているが、排水溝、炉跡などそれを決定づける遺構の検出にはいたらなかった。

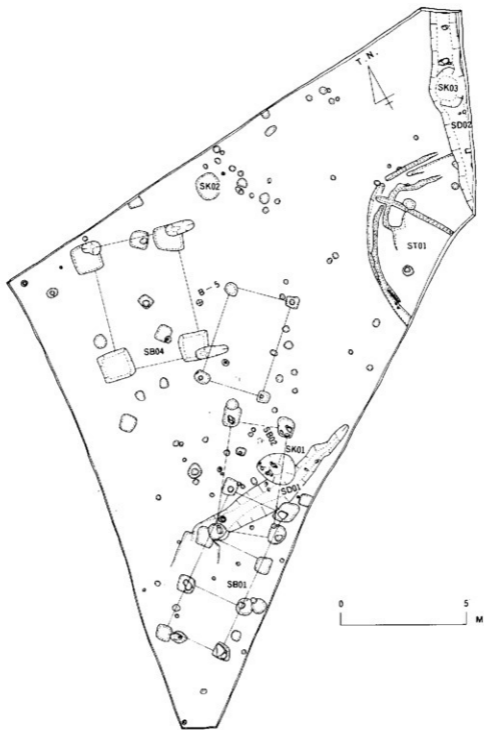
掘立柱建物遺構が倉庫か住居かあるいはそれ以外の目的で作られた建物であるかという問題を置いたとしても、これらの柱穴の掘り方の形状が方形を呈するという事は疑問として残る。このことについては調査区に隣接する場所で実施した普通寺市教育委員会の発掘例および、調査区西側で近接する西碑殿遺跡の例をみたい。

まず普通寺市の調査についてであるが、調査区（A・B-5区）の北側で水田の地下げにともない約250㎡の調査を実施した。調査期間は矢ノ塚遺跡の本調査の期間と重なる。第298図がその遺構配置図である。

検出した遺構は、掘立柱建物4棟、竪穴住居1棟、溝状遺構2条、土坑2、ピットなどである。このうちS B 04が弥生時代中期の掘立柱建物遺構である。1×1間の規模（約3.5×5m）を持ち柱穴の掘り方の形状は方形を呈する。各柱穴ともに規模は大きく、そのうちの1つは125×120cmの大きさを計る。検出面からの深さは80～100cmとなる。3つの柱穴には抜きとり跡が確認された。柱穴の埋上からは弥生時代中期の土器片がわずかに出土しただけである。

S B 04以外に弥生時代中期の遺構として竪穴住居（S T 01）がある。その東側に歴史時代の溝（S D 02）があり、S D 02によって切られているために全体の片程度しか検出できなかった。2個の柱穴、周溝、竪穴の中を横切る溝などを検出している。検出した範囲から想像すると円形状を呈し、直径約8mの規模の竪穴住居となる。調査区内で検出した竪穴住居（S B 85000）と比較すると形状、規模ともに違いが認められる。出土した遺物の検討が十分に行われていないために、この竪穴住居の明確な時期は不明とせざるをえないが、S B 85000より後出するものであると考えられる。

普通寺市の調査区を持つ意味は、横断道調査区内で検出した遺構が北側へ向かって広がること



第298図 善通寺市調査区の遺構配置図

を裏づけたこと、柱穴の掘り方が方形を呈する弥生時代中期の掘立柱建物を検出したことにあると考えたい。

S B04と同様の規模を持つ掘立柱建物が西碑殿遺跡でも検出されている。1×1間の規模を持ち、やはり柱穴の掘り方は方形を呈する。そのうちの一つは長辺が160cmを計る極めて大きいものである。深さは検出面から約70cmを計る。底面には柱の重みのためにできたと思われる円形状の浅い凹みを確認されている。このうちの二柱穴の埋土からほぼ完形に近い壘が1点検出されている。この壘は矢ノ塚V式にあたる。西碑殿遺跡ではこのほか多数の掘立柱建物遺構が検出されており、そのうち柱穴の掘り方が方形を呈するものが数棟ある。各建物遺構の明確な時期については整理が進行していないために不明とせざるをえないが、弥生時代中期のもの、奈良時代のもの、平安時代のものであると考えられている。西碑殿遺跡は時期・構造ともに矢ノ塚遺跡に類似する内容を持ち、両遺跡間に有機的な関係があったと思われる。

普通寺市の調査および西碑殿遺跡の例より矢ノ塚遺跡周辺においては、弥生時代中期の掘立柱建物の柱穴の掘り方は方形を呈するものが一般的であったといえる。しかしなぜ方形にする必要があったのかということは、今のところ不明であり今後解明しなければならない重要な課題として上げておきたい。

次に弥生時代中期の土器については、編年試案を掲げた。香川県においては弥生時代中期の上器編年は紫雲山遺跡の土器編年に依ってきた。しかし紫雲山遺跡の土器編年は矢ノ塚遺跡の土器に照らした時、ある部分では不合理が生じている。編年試案は不合理な部分を意識したものの、解消されているかどうかについては検討できていない。また、他県の例と比較検討するという作業もできていない。そういう意味で編年試案は今後手が加わり改善されていかなければならない性格を持つ。弥生時代中期の資料が増え批判が加えられていくことを期待する。

(2)奈良・平安時代

弥生時代と同じ方形の掘り方の柱穴を持つ掘立柱建物遺構がある。弥生時代中期の遺構と掘り込み面の違いにより埋土で区別してきた。しかし柱穴から出土する土器は、弥生時代中期の土器片に限られるため明確な時期は決定できなかった。包含層からの出土遺物より、奈良時代から平安時代にかけての遺構であると思われる。ほぼ同時期で同じ構造を持つと考えられる遺構が横断道の各遺跡からも検出されている。

金蔵寺下所遺跡では奈良時代を中心とした時期の建物遺構が30棟近く検出されている。柱穴の掘り方は方形を呈するものが多い。各建物遺構の主軸方位はいくつかに分類され、数回にわたる建て直しが考えられている。

稲木遺跡B地区では34棟の建物遺構が検出されている。29棟が700年前後、5棟が平安時代前半の時期が与えられている。各建物遺構は重複、建て変えがあるが、主軸方位より数時期に分けられる可能性が高い。

西碑殿遺跡でも前述したように、奈良時代・平安時代と考えられる建物遺構が数多く検出されている。建物遺構の総数、主軸方位については現段階では明確でない。

矢ノ塚遺跡の建物遺構と金蔵寺下所遺跡、稲木遺跡B地区の建物遺構を比較した時、2つの点で違いが認められる。(1)矢ノ塚遺跡の建物遺構の主軸方位は統一性がなくばらばらである。(2)金蔵寺下所遺跡、稲木遺跡B地区の建物遺構の周辺からは、建物の主軸方位と同じ主軸方位をもつ溝状遺構が多数検出されているが、矢ノ塚遺跡にはみられない。それらの溝状遺構の主軸方位は、おおむねN30°Wとなるものが多い。

以上の2点である。しかし、これらの相違点は同一の条件より生じた相違点であるともいえる。すなわち、丸亀・善通寺平野にN30°Wの主軸方位をもって遺存すると考えられている条里制が、奈良・平安時代には平野の中心部では施行されていたが、平野の西辺部には及んでいなかったためと推察される。したがって矢ノ塚遺跡の建物遺構は、溝、畦畔、道などの条件により主軸方位を決定したと思われる金蔵寺下所遺跡、稲木遺跡B地区の建物遺構とは違い、自然の地形に制約され建てられたものではないかと思われる。

いずれにせよ、方形の掘り方の柱穴を持つ建物遺構は官衙的な性格を持つものと考えられてきた。それらの建物遺構が平野の西辺部で確認された意義は古代の南海道との関連も含めて、今後の研究において重要な位置をしめるといえる。

(3)中世

中世の遺構については、掘立柱建物遺構、溝状遺構ともにほぼ統一された主軸方位となる。遺構の稿で記述したように建物遺構のそれはN15°～30°Wとなる。おそらく中世の時期には条里制が平野の西辺部にあたるこの地域にも及んでいたものと思われる。それを前提とした時、矢ノ塚遺跡の中世の溝状遺構については、再度検討する必要がある。

3. 遺跡の範囲

調査では遺構の立地と傾斜の関係を見るために20cm間隔の等高線を記録した。しかし削平を受けた場所が多く、また遺構の検出を地山面で行なったために、各時期ごとの遺構の立地と傾斜の関係については明らかにできなかった。したがって第7図は検出した地山面での等高線である。この等高線は現地形の地表での等高線とほぼ同一となる。各時期ごとの遺構配置を見る限り等高線と遺構の立地には重要な相関関係は見い出せない。したがって矢ノ塚遺跡は天霧山の南西裾野の傾斜地上に展開された遺跡であるといえる。

最後に調査区内での遺構の検出状況をもとに推定される矢ノ塚遺跡の範囲について記述したい。

まず弥生時代の遺構についてであるが、その西辺はU-9区で確認されている。U-9区西辺では旧谷筋と思われる南北方向の流れを検出した。この南北方向の流れはU-10区あたりで矢ノ塚遺跡の南辺を画する東西方向の谷筋と合流すると思われる。予備調査のトレンチではこれより

西側では遺構は確認されていない。したがってこの南北方向の流れを矢ノ塚遺跡の西辺とすることができる。

またD列で検出したS D85036をおおむね境界としてそれより東側では弥生時代の遺構は全く確認されていない。したがって弥生時代の遺跡の東辺をこのS D85036におくことができる。普通寺市の実施した調査の例をみても解るように、北側へ向かって弥生時代の遺構が広がっている可能性が高い。また等高線と遺構の関係より、ほぼ同様の等高線の間隔が認められる範囲には弥生時代の遺構は全面に広がっているという予測がたてられる。したがって、等高線が密集するいわゆる天霧山となる位置まで北側に向かって弥生時代の遺構が広がっていると考えたい。

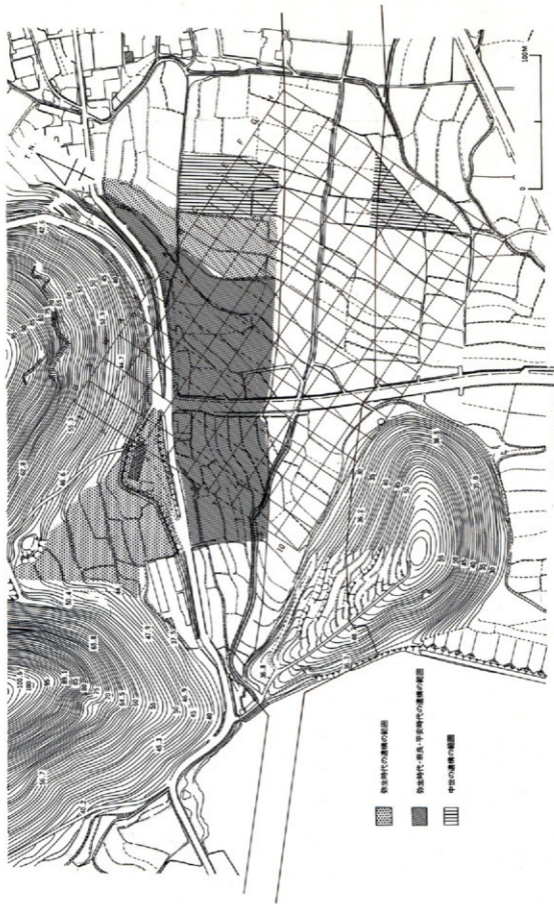
奈良・平安時代の遺構の西辺は弥生時代と同様となる。東辺はB-5区付近に求められる。B-5・6区には現地形で約40cmの段差が認められる。この段差は遺構の積で記述したように溝状遺構の東側を削平したものである。北側では普通寺市の調査区のS D02につながっていく。この段差が境界となり、それより東側では、奈良・平安時代の遺構が全く検出されない。したがって、この溝状遺構が奈良時代の東辺を画する性格をもつものであると考えられる。溝状遺構が現地形での段差と重なっていることより、それより北側でも同じ状況になっていることが予想される。

U~D列の中世の遺構の範囲については、W~A列に限られる。この間の遺構も比較的低地に集中している。したがってW~A列の中世の遺構は調査区外北側の高地に向かつては広がっていないと考えられる。

E~H列にかけては調査区内では中世の遺構だけが検出された。この部分の東辺は二反地川の氾濫源と考えられる範囲となる。H列がおおむねその位置である。またG-3区からH-4区の東辺では北西から南東方向の谷筋が確認されている。この谷筋は現在の地目にも反映されていると思われる。F-1・2区の中央にあたる畦畔より東側が旧谷筋と思える範囲である。谷筋近くでは遺構は希薄となり消滅していることより、北側へ向かつてはF-1・2区より西側だけで遺構が広がるものと考えられる。また調査区内のF・G列の北辺では遺構の密度が希薄となるために北側に向かつては、中世の遺構は大きくは広がらないと考えられる。

中世の遺構の範囲の南辺は二反地川の氾濫源に求めることができる。二反地川に沿って幅約15cmの地目の乱れが認められることにより、この範囲まで中世の遺構が広がる可能性が高い。

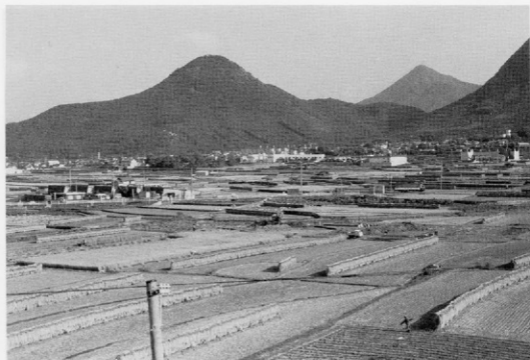
以上をまとめると第299図となる。普通寺市内では横断道関連の工事が増発している。それらに対応する意味でも矢ノ塚遺跡の範囲については、今後とも検討を加えていかなければならないだろう。



第2796図 久ノ瀬遺跡の範囲図式図

-  古墳時代の遺跡の範囲
-  古墳時代・原始・平安時代の遺跡の範囲
-  中世の遺跡の範囲

圖 版



(1)調査開始時の調査区



(2)調査区より南の風景



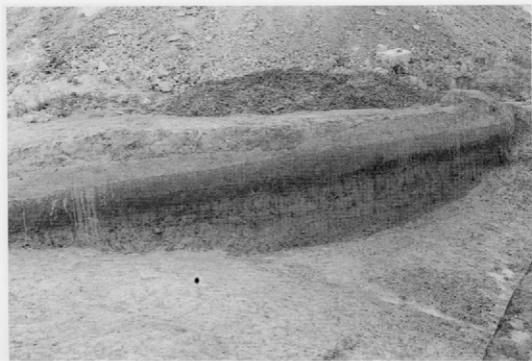
(1)発掘作業風景



(2)発掘作業風景



(1)U列全景 (東より)



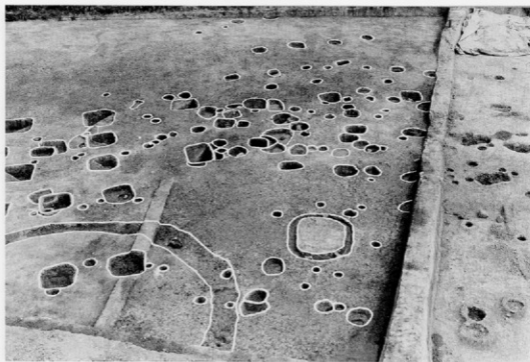
(2)U列土層 (南壁)



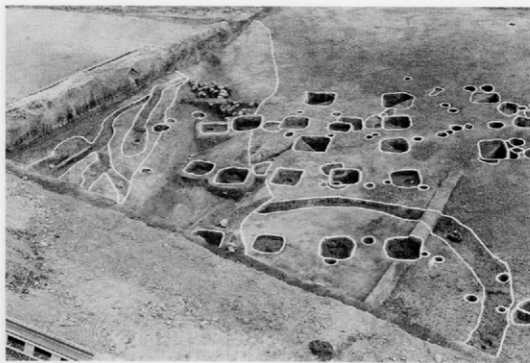
(1) V列全景 (南より)



(2) V列全景 (東より)



(1) S B 85109・110・118 (V列)



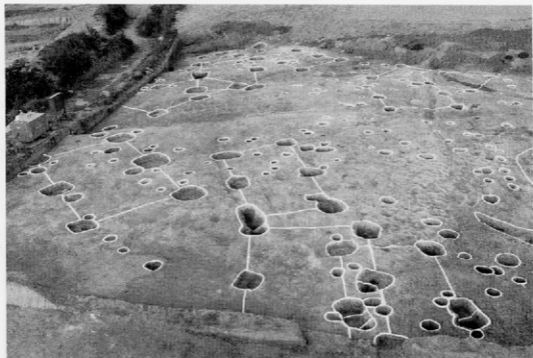
(2) S B 85104・111・112 (V-9区)



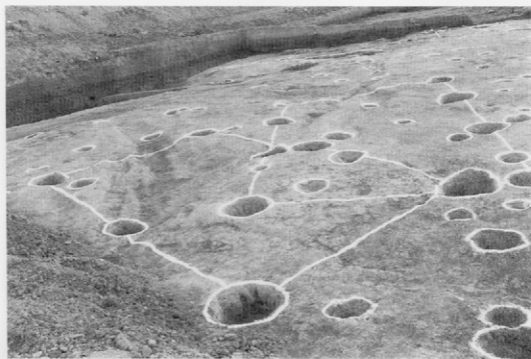
(1) S D85123土器出土状態 (V-9区)



(2) W列全景 (西より)



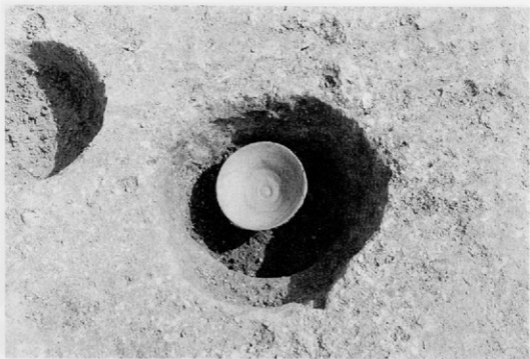
(1) W列 掘立柱建物群



(2) S B 85116 · 117 (W-9区)



(1) S D85120周边 (W-9区)



(2) 土器出土状态 (W-8区)

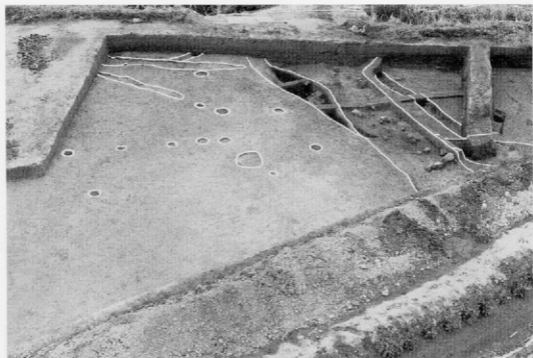


图 1 (1)X-8 (N)区上層遺構



图 2 (2)X·W-8 (N)区下層遺構



(1) S B 85103 (X · W - 8 (N) 区)



(2) S K 85104 (W - 8 (N) 区)



(1)土器出土状態 (W-8(N)区)



(2)X-8(S)・9区全景(北より)



(1) X-8 (S)・9区全景 (西より)



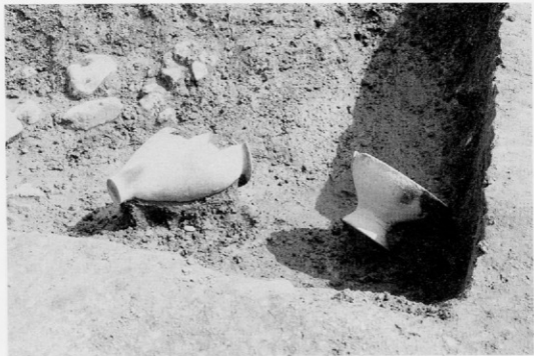
(2) SB85101 (X-8 (S)区)



(1) S B 85102 · 105 · 106 (X-8(S)区)



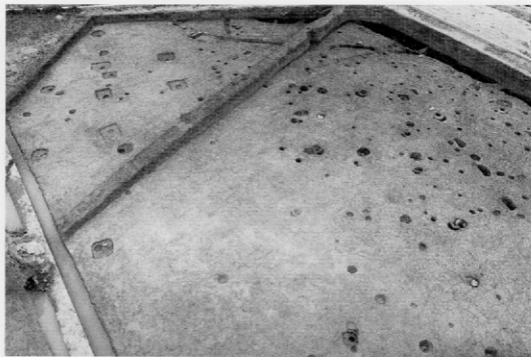
(2) S D 85101土層 (X-8(S)区北壁)



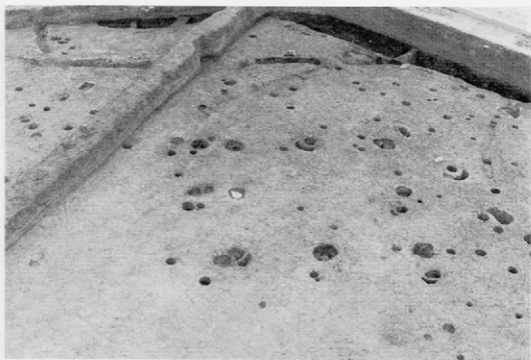
(1) S D 85101 土器出土状態 (Y-9 区)



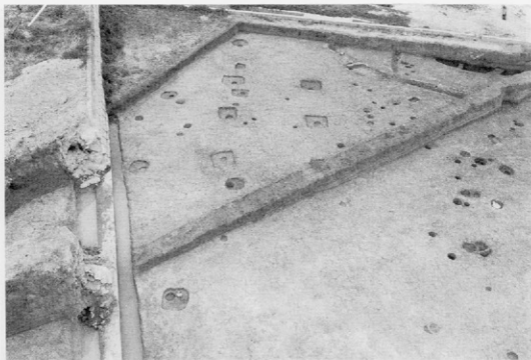
(2) Y・Z-6・7 区全量 (東より)



(1) Y・Z-6・7区全景 (西より)



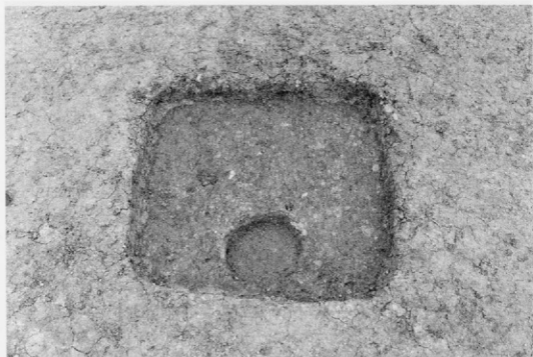
(2) S B85017 (Y・Z-7区)



(1) S B 85009 · 010 (Y · Z - 6 区)



(2) S B 85001 (Y · Z - 7 区)



(1) S B 85009 柱穴



(2) Z-8区全景 (北より)



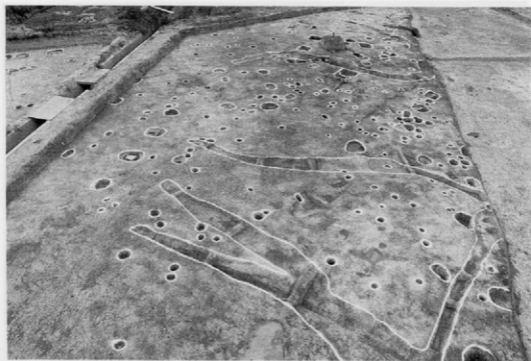
(1) S D 85004・008完掘状态 (Z-8区)



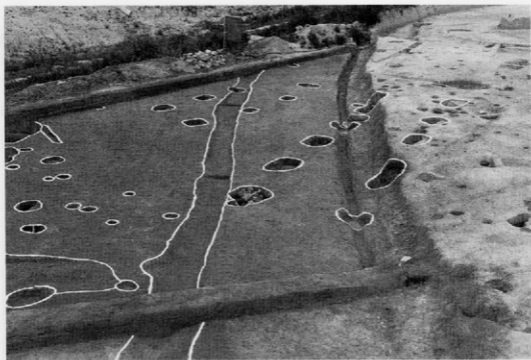
(2) S D 85004土层 (Z-8区)



〔図1〕(1)Z-7区全景(南より)



〔図2〕(2)A・B列全景(南より)



(1) S B 85002 • 021 (B - 6 区)



(2) S B 85002 柱穴 (B - 6 区)



(1) C・D列全景 (西より)



(2) S D 85031土器出土状態 (C-5区)



(1) C・D・E列全景（東より）



(2) D例全景（北より）



(1) S D 85036 土器出土状态 (D-4 区)



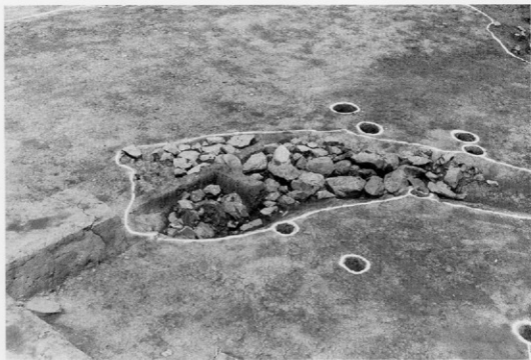
(2) S D 85036 土层 (D-4 区北壁)



〔图1〕(1)E列全景(西より) 2000 2/3



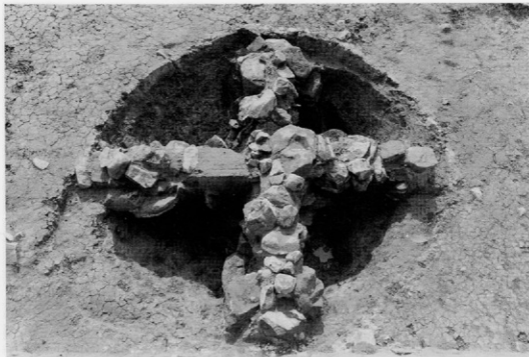
〔图2〕S D85037 (E-4区) 2/3



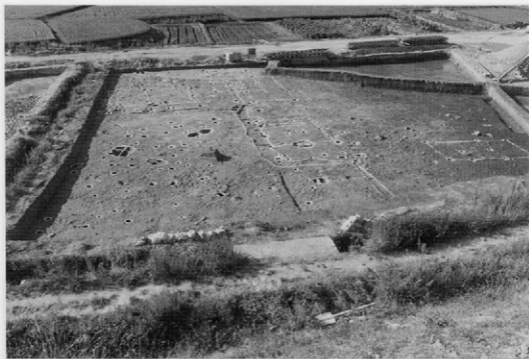
(1) S X 85005 (E-4区)



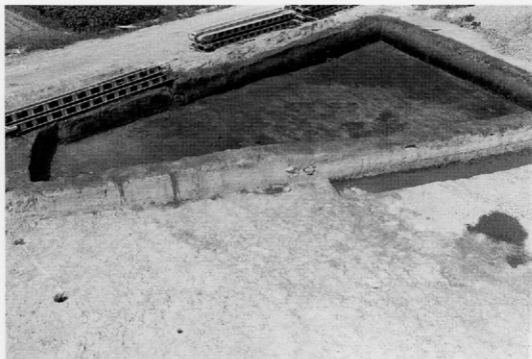
(2) S X 85005完掘状态 (E-4区)



(1) S X 85006 (E - 4 区)



(2) F・G列全景 (南より)



(1) G-2区全景 (南より)



(2) F-5・6区全景 (東より)



(1) S E 85001 (F-5区)



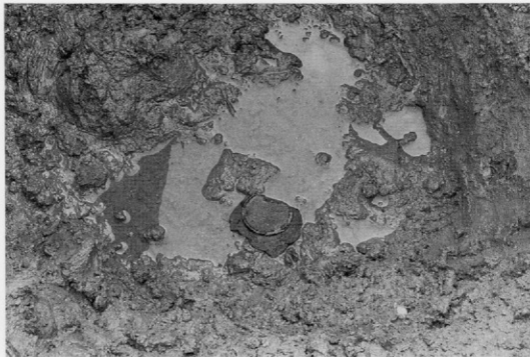
(2) G-5区全景(東より)



图2 (1)G-4・5区全景(南より)



(2)S E 85002完掘状態(G-5区)



(1) S E 85001木製椀出土状態 (G-5区)



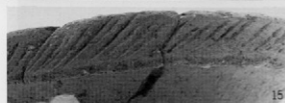
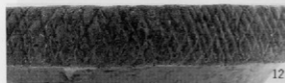
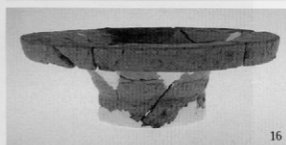
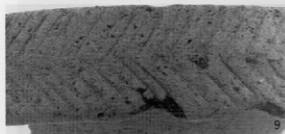
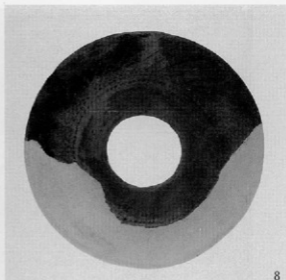
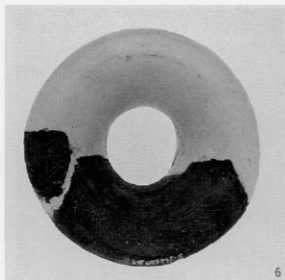
(2) H-4・5区全景 (東より)



(1)柱根検出状態 (G-5区)



(2)H列全景 (東より)

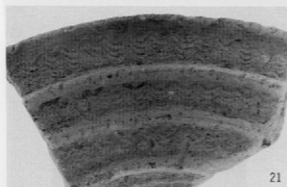




17



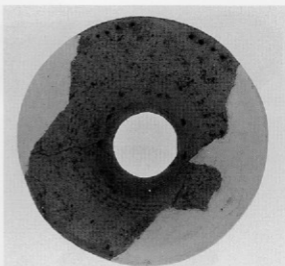
17



21



22



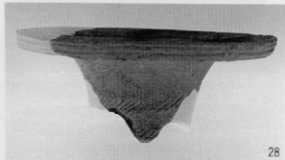
19



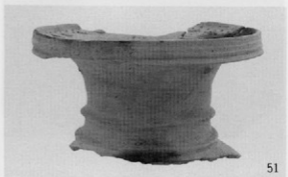
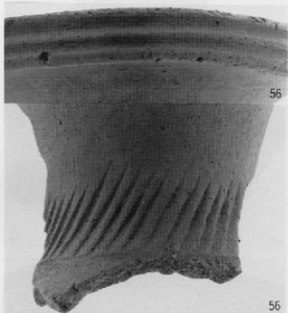
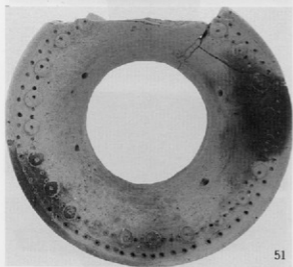
19

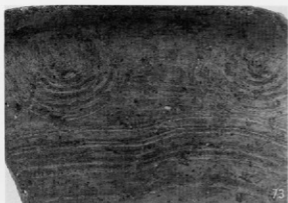


24



28





73



78



94



108



109



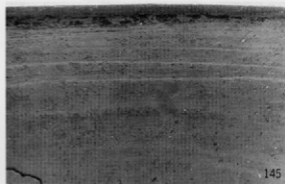
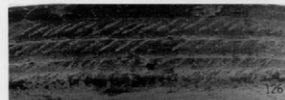
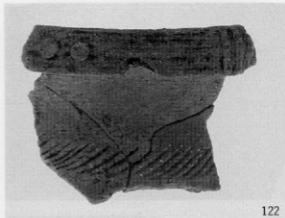
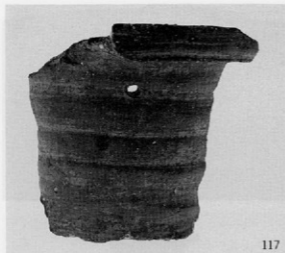
115

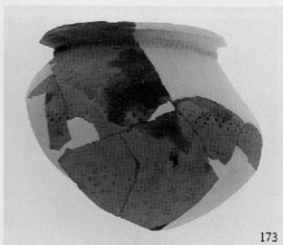
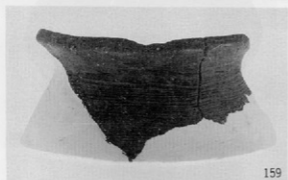
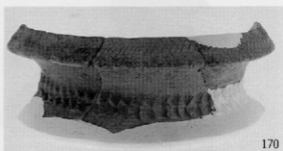
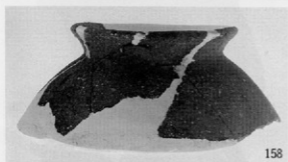
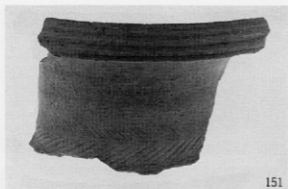


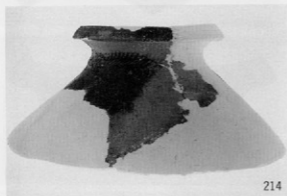
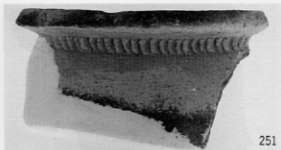
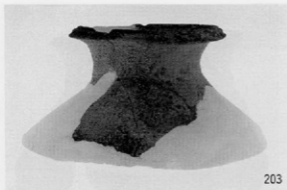
114

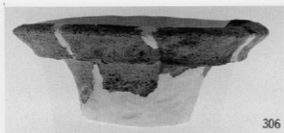


116









306



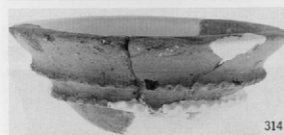
315



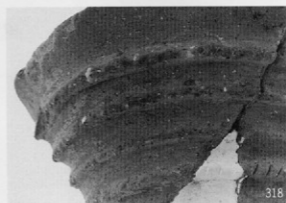
310



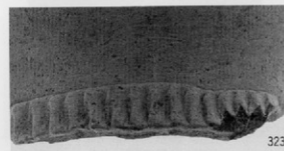
316



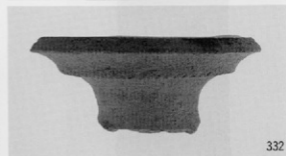
314



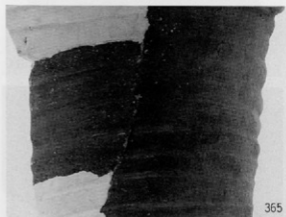
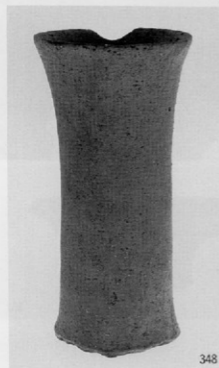
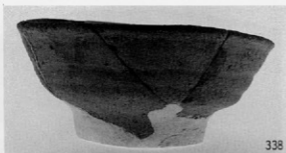
318

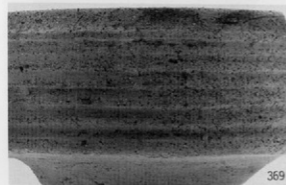
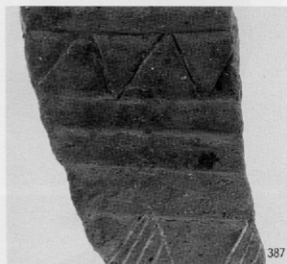
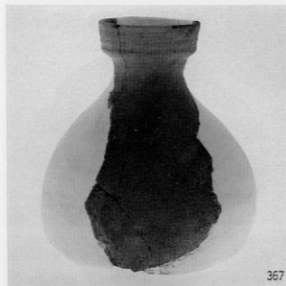
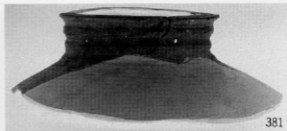
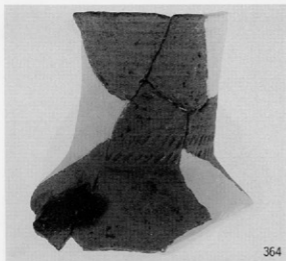


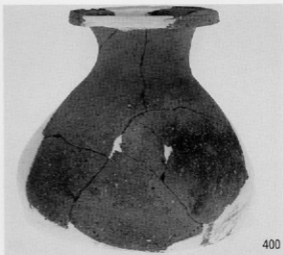
323

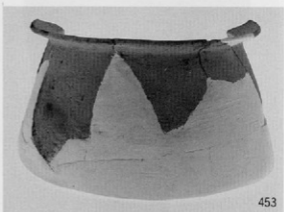
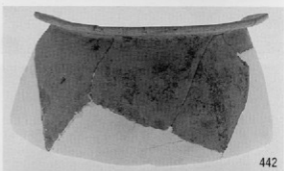
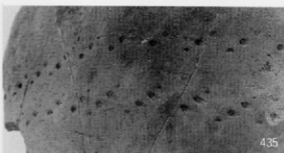
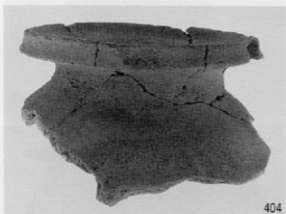
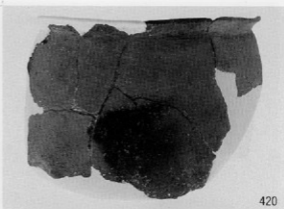
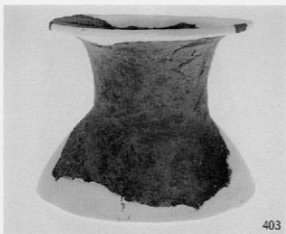


332

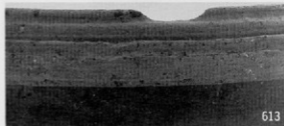
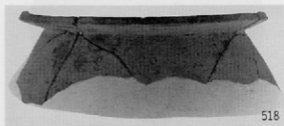
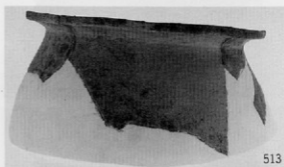
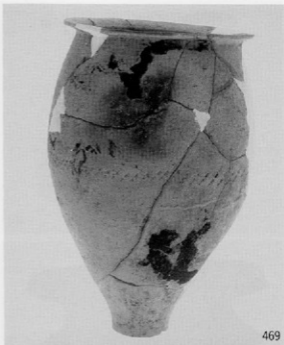
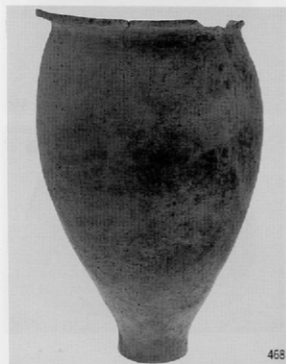
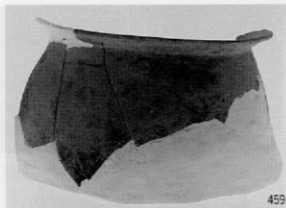
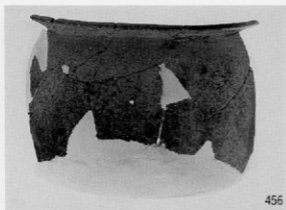


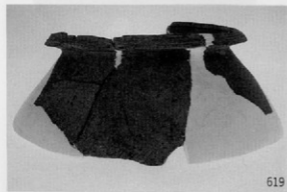
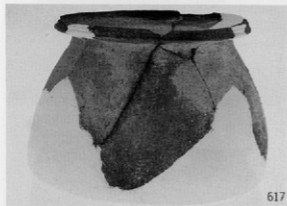
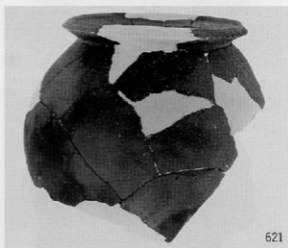


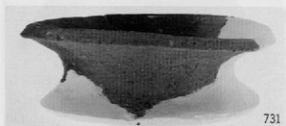
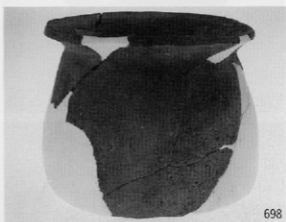
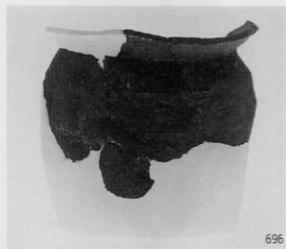
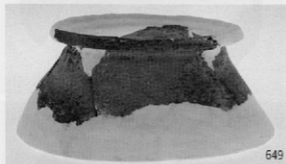
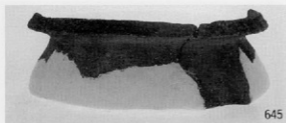




弥生土器 壺(後期)・甕₁-(a)・₁-(b)

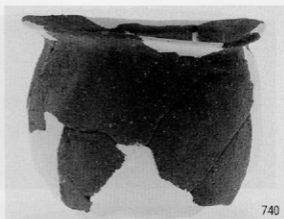




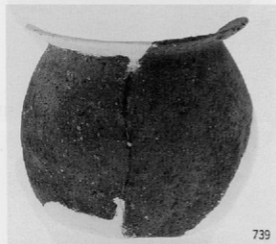




732



740



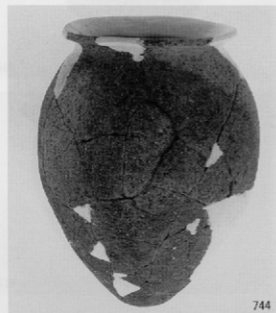
739



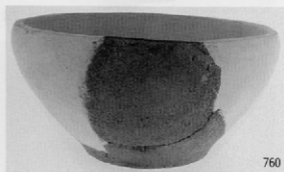
747



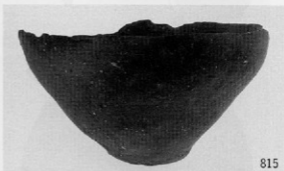
758

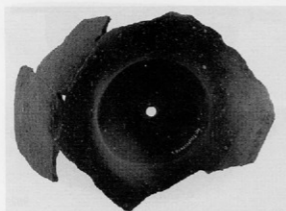


744



760

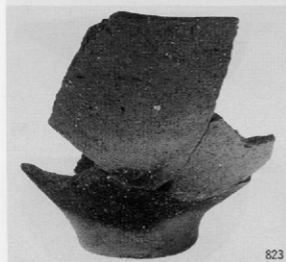




823



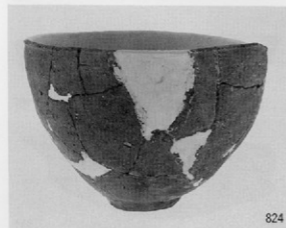
827



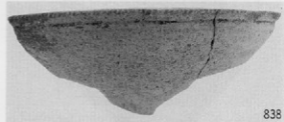
823



829



824



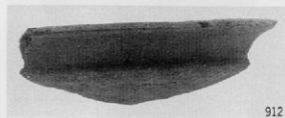
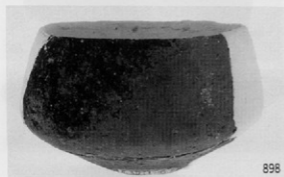
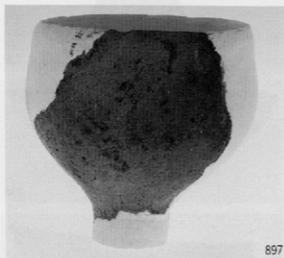
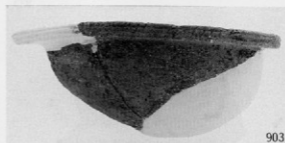
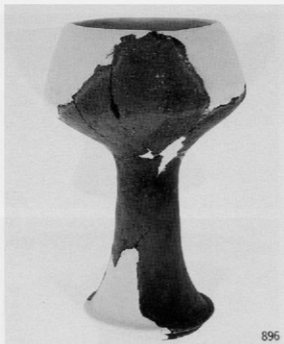
838



865



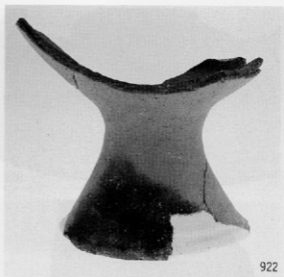
883



弥生土器 高杯C₁・D₂・D₃-(1)・D₃-(3)・(後期)



913



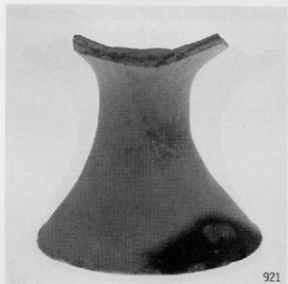
922



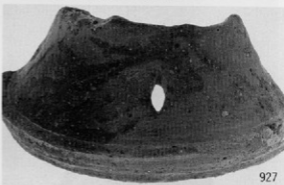
917



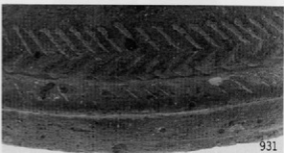
925



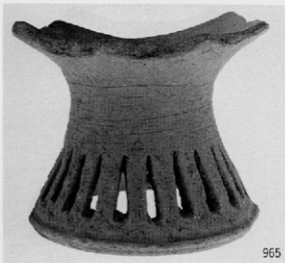
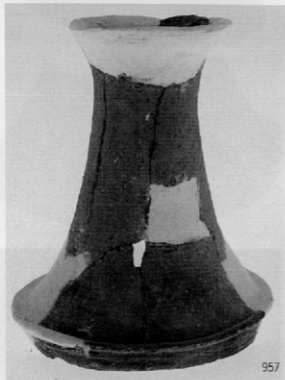
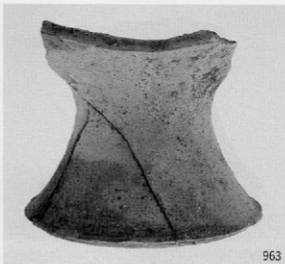
921

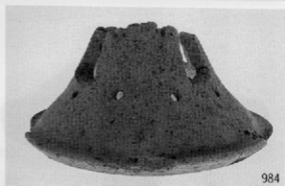
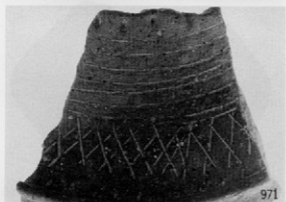
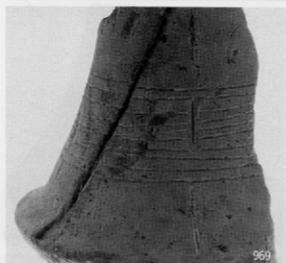
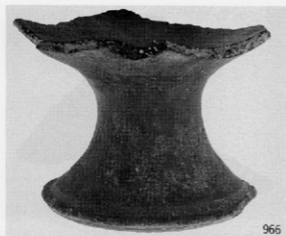


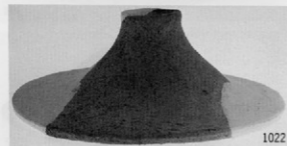
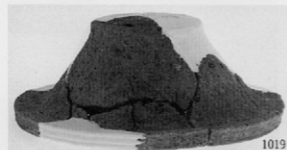
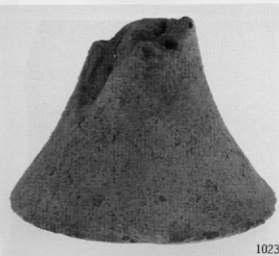
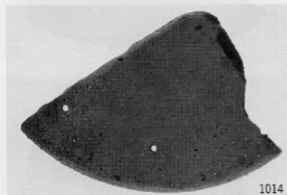
927

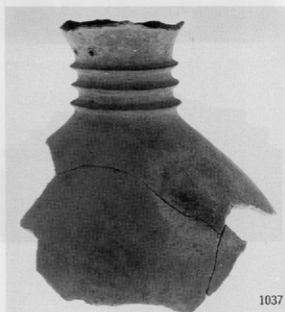
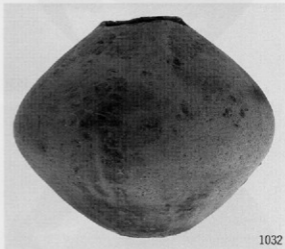
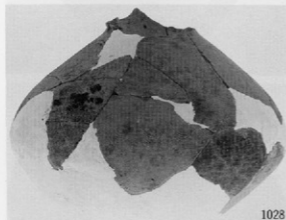
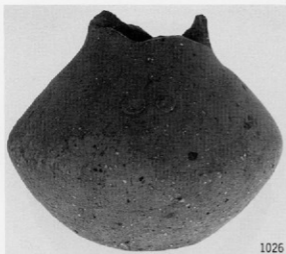


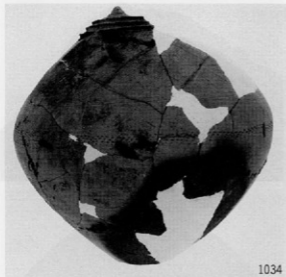
931







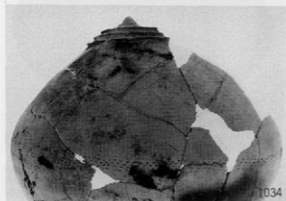




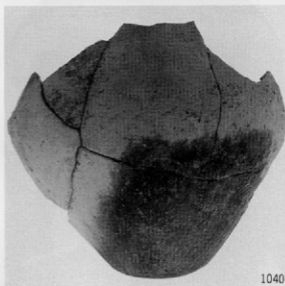
1034



1038



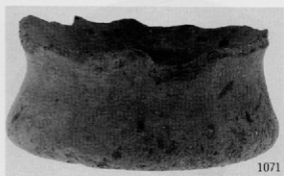
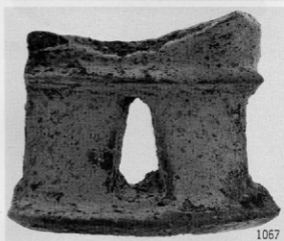
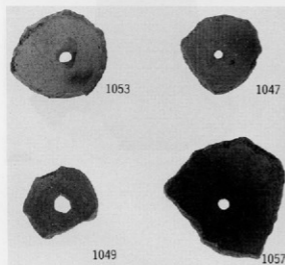
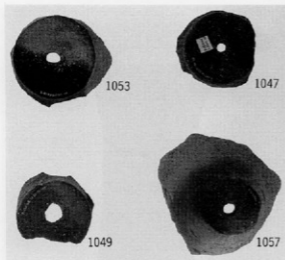
1034

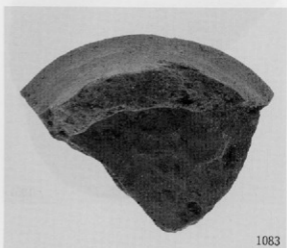
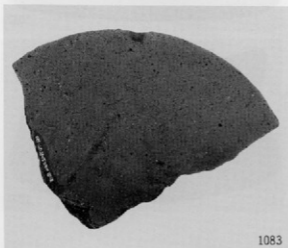
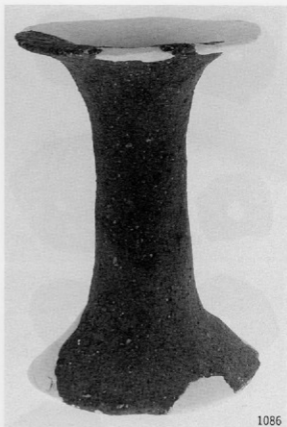
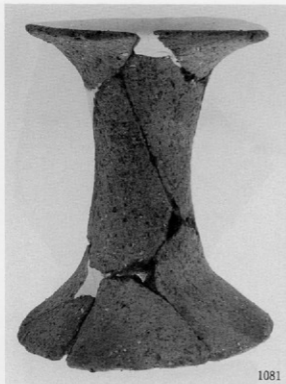


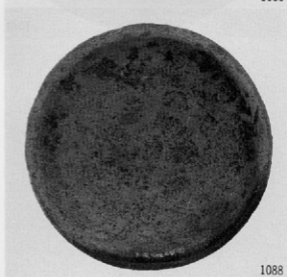
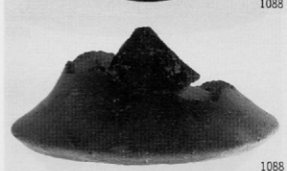
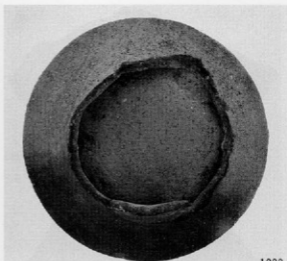
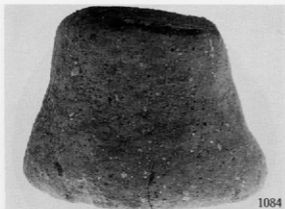
1040

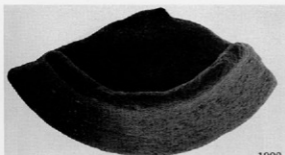


1034





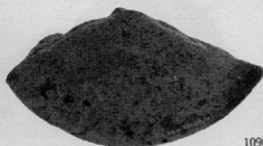




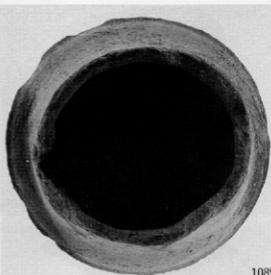
1090



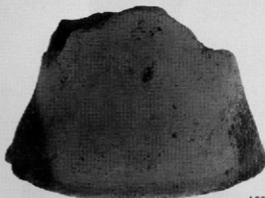
1090



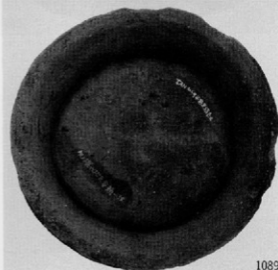
1090



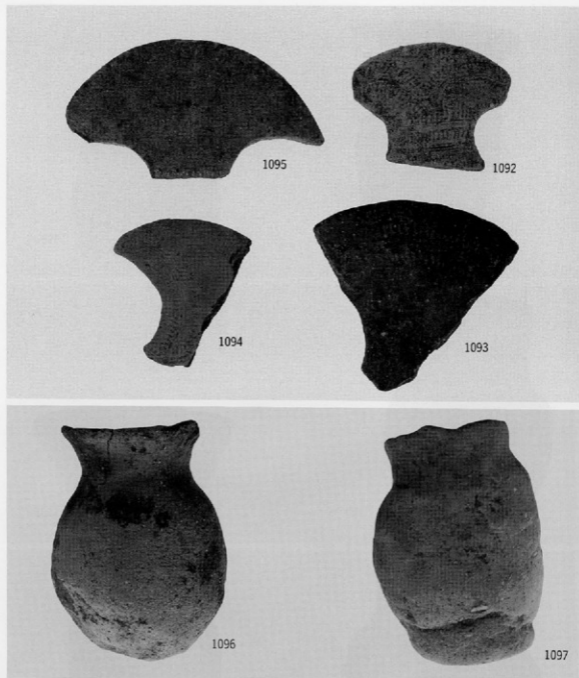
1089

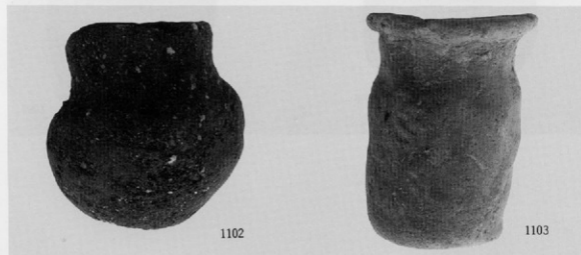
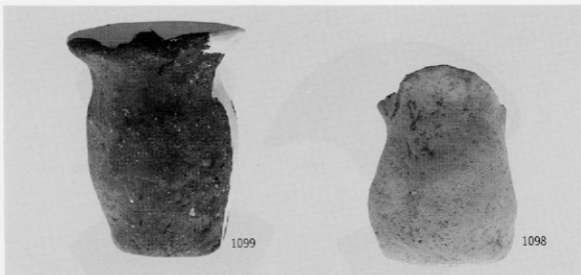


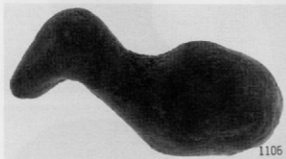
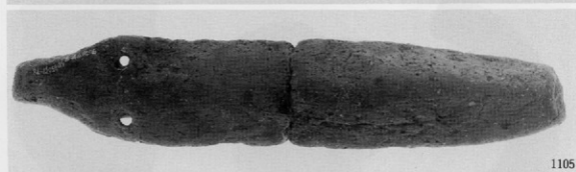
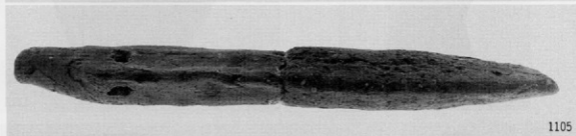
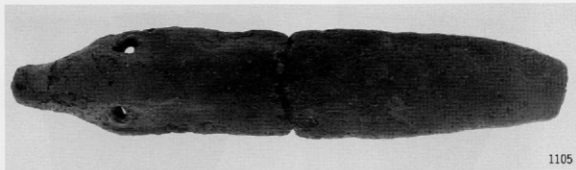
1089

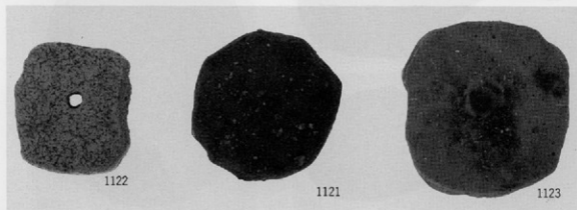
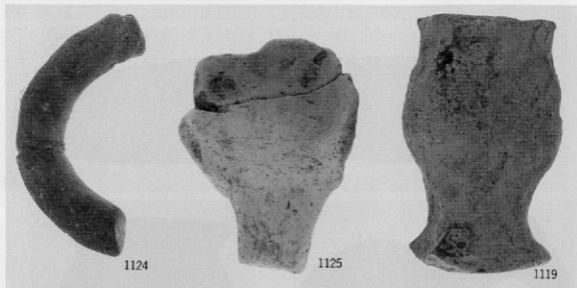


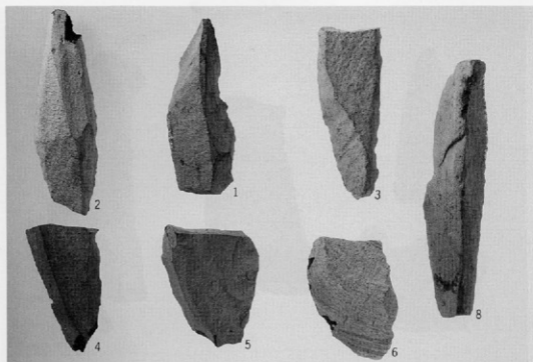
1089



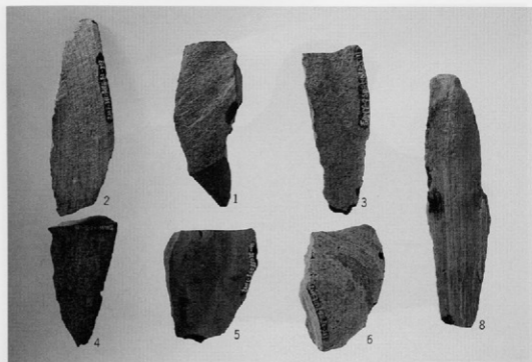








(1)旧石器 (ナイフ形石器・翼状剥片・横長剥片)



(2)同上裏面